僕の日常にグッバイ

隼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕の日常にグッバイ

【Ｎコード】
Ｎ９４１６Ｓ

【作者名】
隼

【あらすじ】
僕は、女顔で恥ずかしがり屋で内気で怖がりな高校二年生。
女だと勘違いされたり、男から告白されたり、襲われそうになったり、そんなのはしょっちゅうだ。
そんな、ただでさえ不幸な自分にさらなる不幸が訪れることになるとは……。
「お前が今まで男だったのも情報のズレによるものだ。つまり本来のお前は女。ま　あ、そんなことはどうでもいい。これから言うことをよく聞け。世界が危ないーー」

僕は『男』を失い、美少女になると同時に、世界を救うという重荷を背負わされた。

＊かなりスローペースな更新になりますが、こんな作品でも読んでくれたら幸いです。

平凡な生活はどこへ

「桜庭玲（サクラバレイ）さん、ずっと前から好きでした。俺と付き合って下さい！」

朝、学校の門の前でいきなり告白された。相手は、目の前にいる顔を真っ赤にした北条という男子生徒。見た目はいたって普通で、これといった特徴もない。クラスに一人くらいはいる目立たない奴といった感じ。

周りの登校中の生徒は、何事かと足を止めてこちらを見てくる。僕はあまりの恥ずかしさで顔を真っ赤にしてしまった。

登校中にいきなり後ろから呼び止められ、心の準備もないままに告白される。しかも、みんなの前で。

これは罰ゲームですか？

「あの……なっなんで……僕なんですか……」

下に向けていた顔を上に向ける。身長が低いため、自然と北条を見上げる形になってしまう。

「それはキミが萌……じゃなくて、見た目も性格も好きだからです！」

それって、つまり僕のすべてが気に入ったってこと？　たしかにそれは嬉しい。けど、この人は一番大事なことに気づいていないんじゃないかな。

「あの……僕の着ている制服を見て何か思わないの？」

「ん？　別にいつもと変わったところは無いと思うけど？」

僕の全身をジロジロと見た後、頭を傾げながら言う北条。たしかに僕の着ている制服には変わったところはない。

でも、僕が着ている制服を見れば何がおかしいのかわかるはず。だって、僕が着ているのは男子用の制服なんだから。

考えてみてほしい。男子が男子に告白する。これって、全く普通じゃないよね？　それなのに、目の前にいる北条はそんなのことを気にしている様子はない。

つまり、この人は僕が男だと分かって言ってる？　いや、まだ可能性はある。もしかしたら僕を男装した女子だと思っているのかもしれない。
「あの、僕は男なんですけど……」
「もちろん知ってる。でも、大事なのは愛だ！　性別なんか関係ない！」
うぬぬ、やっぱり。この人は僕が男だって分かってたか。こういう人が一番困るんだよね。あきらめが悪かったりするから。
僕は女顔だから顔だけを見て女だと判断する人もいる。実際、その方がまだましだ。なぜかというと、そういう人は僕が男だと分かればあきらめてくれるから。
「あなたに関係なくても、僕には関係があるんです。僕は女の子にしか興味ないし……」
服の裾を掴みモジモジしながら答える。こういう行動が男らしくないと言われるのだけれど、性格は行動に出るものだから仕方がないと思う。
僕は恥ずかしがり屋で怖がりで内気だ。情けないよね……もう高校二年生なのに。
「もっ……もっ……もっ」
ん？　目の前の北条が何やらブツブツと言い始めた。一体どうしたのだろう？
「ももっ……もっ……」
なおも言い続ける北条。何か嫌な予感がする。この流れからいくとーー
「萌えぇぇぇぇ！」
ほら来た！　両手を広げながら北条が飛びかかってくる。ついさっきまではただの目立たない奴だっのに、今は獣と化している。
「ひっ！　くるなぁ！」
ここで蹴りでも入れられたらいいのだけど、僕は両手で頭を抱えるだけ。怖がりなんだから仕方ないじゃん。立ち向かうとかできる

わけないし。それに、そんな事しなくてもいいんだよね。
この北条の行動を周りの人達が許すはずないから。
「てめっ、俺だって抱きつきたいのに何調子に乗ってんだよ！」
「私のアイドルに手を出さないでよ！」
「玲の初めては俺のもんだ！」
周りにいる生徒のうちの一人が北条に跳び蹴りを入れ、それを合図に他の生徒達が一斉に飛びかかる。そして、それとほぼ同時に人垣の中から悲鳴が響く。
うちの学校はなんていい人だらけなんだろ。人が困ってたらみんなで助けてくれるんだから。まあ、でもちょっとやりすぎな気もするけどね。それに、変な言葉が聞こえた気がするんだけど気のせいかな？
「おっ玲。おはよう！」
目の前の正義の行い（集団リンチ）を見ていた僕は後ろから声をかけられた。
振り返った先ににいたのは僕の親友、相沢誠（アイザワマコト）だった。
「おはよう誠。今日も相変わらず爽やかだね」
「相変わらずって何だよ。爽やかで何が悪い」
そう言い終えた誠がニカッと笑う。口からは白い歯が覗き、髪はサラサラと風になびく。何で誠はこんなにも爽やかなんだろ。
落ち込んでいる奴には誠の笑顔を見せればいい。そうすれば元気になる。そんな冗談を聞いたことがあるんだけど、あながち間違いじゃないと思う。
「なあ、お前の後ろにいる奴らは何で騒いでるんだ？」
僕の方に歩み寄ってきた誠が北条達を指差して尋ねてくる。ああ、まだ正義の行い（集団リンチ）をやってたんだ……。
「え～とね、あれはね、僕を男だとわかっていながら告白してきた、北条っていう人が制裁をくらってるんだよ」
「え？　お前に告白したから制裁くらってんの？」
「いや、そうじゃなくてね。途中で北条が襲いかかってきたから、

周りの正義感の強い人達が助けてくれたんだよ」
「玲……お前また襲われそうになったのか。しかも、正義感じゃないと思うんだよなぁ……」
誠が考え深げにこちらを見てくる。僕、何か変なこと言ったかな？
「お前さ、自分の魅力に気づいてる？」
「魅力なんてないよ？　男のくせに怖がりだし、内気だし、恥ずかしがり屋だし、いいところなんて一つもない。おまけに女顔だし」
あれ？　何でだろう？　誠が頭を抱えてる。また何か変なこと言っちゃったのかな？
「よし、玲。俺が今から言うことをよく聞けよ。これから言うことはマジな話だ。本気と書いてマジだからな」
いつもの爽やかな顔が珍しく真剣な顔になった。たぶん、本当に大切な話なんだと思う。
「お前はさ、だいたい油断し過ぎなんだよ。はっきり言う。今のままだとーー」

＊＊＊

教室に響くのは、数学の先生による問題の解説の声。僕はそれを熱心に聞きーーたかった。
全く集中できない。さっきの誠の話が頭から離れないのだ。授業中だけでも忘れていようと思うのだけど、まるで接着剤でくっつけたかのように頭から離れない。
誠の話をまとめてみるとこうなる。
第一に、僕はどっからどう見ても学ランをきて男装しただけの美少女であり、決して男には見えない。

第二に、僕が知らなかっただけで実は『玲ファンクラブ』というものまであり、かなりのメンバー数を誇る。
第三に、僕を男だと知りながら好意を抱いている男が実はたくさんいる。しかも、男だと知って諦めた人の中に、やっぱり男でもいいやと考え始てる奴がいる。
う～ん、なんということでしょう。喜ぶべきなのか悲しむべきなのか……悲しむべきだよね。あっ、そういえば誠が最後にこう言ってたっけ。
「お前はいつも狙われてると思って行動した方がいいぞ。襲われ確率高いから」
何で今まで平気だったんだろう？　この状況を例えるなら、ライオンの群れに飛び込んだウサギみたいなものかな……。
ああ、これからの高校生活が不安だ。僕は地味に目立たず暮らしたいのに。
どうにか男らしくなる方法はないかな？　例えば、この肩まで伸びた髪を短く切っちゃうとか。もしくはこの色白の肌を頑張って小麦色にするとか、筋肉をつけるとか。
……全部だめだ。前に髪を短く切ったらクラス全員に似合わないって言われたし、肌を焼こうとしたときは肌が赤くなってヒリヒリしただけだし、筋トレした時は全く筋肉がつかなかった。
何だろ、僕って呪われてんのかな。
思わずため息が出る。そして、何となく周りを見ているとあることに気づいた。異常にクラスメイトと目が合うのだ。
今は授業中なんだけどな。もしかして僕のことをチラチラと見てる？　そう考えると急に恥ずかしくなってきた。思わずモジモジとしてしまう。
今まで気づかなかっただけで、ずっと見られてたのかもしれない。何か泣きたくなってきた。泣いちゃ駄目だとわかってんのに。
「玲？　どうしたの？」
隣の席から声が聞こえた。声の主は水谷美海（ミズタニミウ）。中学校から一緒だ

った唯一の女友達。世話好きで、なぜか僕のことになると異常な反応をしめす。
誠によると美海は僕の次に人気があるとか。たしかに美海は可愛い。目はパッチリしてるし、腰まで伸びた栗色の髪の毛はサラサラだし、肌も透き通るように白い。
それなのに、その美海を差し置いて僕が一番なんて一体どういうこと？
「具合でも悪いの？」
そう言いながら美海が僕の顔を覗き込んでくる。涙目になっているのがバレないように下を向いていたんだけど、それは意味がなかったみたい。
「どうしたの！？　なっなんで泣いてるの！？」
美海の予想以上の反応に驚き思わず顔を上げる。視界に入ったのは、立ち上がって目を見開いている美海だった。そんな表情されたらオバケだって逃げだしちゃうよ。
「ねぇ、どうしたの！？　誰かに何かされたの？　私が味方だから安心して！」
いきなり美海が抱きしめてくる。心配してくれるのは嬉しいんだけど、余計目立っちゃう。ほら、みんなこっち見てる。
「ちょっ、ちょっと美海。大丈夫だから離して」
「いいの、何も言わなくても。私は玲の味方だからね？」
さらに力を入れて抱きしめてくる。ダメだ。話を聞いてくれそうもない。ちなみに、美海は気づいていないかもしれないけど僕に胸が当たってる。
僕も一応男だから正直これはもの凄く嬉しい。天にも昇る心地だ。でも、それは状況が違ったならという話で、今はそんなことも気にならなくなるくらい恥ずかしい。
だってさ、周りのクラスメイト全員がこっちに熱い視線を送っている上に、「最高のツーショットォォォォォォ！」とか叫びながらカメラで連写してる人がいるんだもん。

「あれ！？　なんでまだ泣いてるの！？　ねぇなんで？　お腹がすいてるの？　何なのよ～！」
僕が泣き止まないとわかった途端、美海がパニックに陥った。
美海は僕のことを心配しすぎる余りにたまにこうなってしまう。
美海の僕に対する反応は過保護どころの話じゃない。僕が少し指を切ったくらいで病院に連れて行こうとするし、風邪をひいたと聞くと夜中でも僕の家に飛んでくる。
だから、今日の朝みたいに襲われそうになった時のことなどは一度も話したことがない。もし話したら美海が発狂してしまいそうな気がするから。
そんな美海を前にして泣き止まなきゃいけないと思うんだけどーー
「ウホッ、ウホホッ！　泣き顔最高ぉぉぉぉ！　今取った写真は永久保存、永久保存じゃぁぁぁぁ！」
「我、この泣き顔しかと目に焼き付けたり！　後生に悔いなし！」
「今日の夜のオカズは君に決めた！　泣き顔、ゲットだぜ！」
うん、無理。泣き止むどころかさらに涙が溢れてきた。興奮している一部の生徒がもの凄く怖い。
「玲、なんでさらに泣いてんのよ～！　どうしたら泣き止んでくれるの？　ねぇ、どうしたらいいの？　もしかして、私の初めてをあげたら泣き止んでくれるの？」
今の美海の発言で男子生徒は鼻血を吹き出し女子生徒は顔を赤らめる。既に教室はパニック状態だ。
もう、どうしようもない。肝心の先生も鼻血を流して気絶しているのでこの混乱を止める人がいない。やっぱり先生も男なのだ。
ああ悲しきかな男の性よ。
この混乱の原因が自分にあると思った僕は、絶望的なこの状況を打破すべく、わずかな希望を求めて離れた席にいる誠の方を見る。
涙で潤んだ視界に入ったのは、床に仰向けで倒れて気絶している誠の姿だった。このままだと出血多量で死ぬんじゃないかと思うほど鼻血を勢いよく吹き出している。

それを見て、一瞬心配してしまった自分が情けない。だって、誠がだらしない顔をしていたから。爽やかさを残しながらのいやらしい顔。

そういえば誠ってスケベだった。その割にはこういうことに対する耐性がないのは謎だけど。もしスケベに向き不向きがあるのなら、誠は向いていないと思う。

ーーって、そんなことはどうでもいいや。とりあえず、誠に助けを求めようとしたのが間違いだった。

「グスッ……どうしたら……グスッ……いいの……」

「ウホホッ！　こんどは玲タンの奇跡のボイスゲットォォォォォ！」

「有り難き幸せ！　命を差し出す覚悟でございます！」

「くっ……なんだこのワザは……威力が強すぎる……ＨＰが……うっ！」

わずかな希望を失った僕に、追い討ちをかけるかのような三人の言葉が耳に入った。最後の奴なんか言葉の途中で気絶しちゃったし……。

ああ、何かどうでもよくなってきた。なるようになっちゃえ。どうしようもないんだから。

泣き虫でダメダメな自分が導きだした結論は、あきらめるということだった。

もう我慢するのを止めて思いっきり泣き出そうと思った瞬間、どこからか声が聞こえた。

「おいおい、そんなんじゃダメだろ。お嬢さんよ～」

少年の声をしているのにどこかオジサンくさい喋り方。声と喋り方がマッチしていない。違和感ありまくり。

その声は騒がしいはずの教室ではっきりと聞こえた。でも、近くにその声の主らしき人物はいない。キョロキョロと辺りを見回しても、見えるのはさっきと変わらない様子のクラスメイト。

「お前はどこ見てるんだ。ほれ、こっちだよ。こっち」

小馬鹿にしたような口調で語りかけてくる。やっぱり姿が見えな

い。まわりのクラスメイトはこの声に気づいている様子もない。
「だっ、誰？　ヒクッ……どこに……いるの？」
未だに涙が止まらない僕は、涙声で尋ねる。
「ほら、ここだ。上だよ、上。お前の上だ」
上にいる。そんなバカなことがあるわけない。だってさ、上はさ、ただの天井だよ？　まさか人間が天井に足をついて立てるわけないし。仮に、上に何かがいるとしたら……それってーー。
「お～い。目上の人の話は聞くもんだ。無視しちゃいかんぞ～」
あきらかに上から声が聞こえる。サーッと血の気が引くのがわかった。あまりの恐怖に涙でさえ止まってしまった。
「ありえないありえないありえない」
そう自分を言い聞かせるようにつぶやき、ゆっくりと見上げる。
「おっ、やっとこっち見たか。おはようさん」
僕の意識はここで途絶えた。

＊＊＊

学校のベルが鳴った。授業の始まりか終わりのベルかはわからないけど、その音で僕は目を覚ました。
上には真っ白な天井、横には空間を仕切るためのカーテンが見える。そして、自分は白いベッドの上で横になっている。うん、ここは保健室か。
そっか、僕は気絶してたんだ。何で気絶してたんだっけ。ベッドに横になったまま考えてみる。
たしか、何か凄いものを見たんだよね。何だっけ？　えっと……みんながパニックになって、僕がやけくそになって、そしたら急に

声が聞こえて……あっ、思い出した。
今思い出しても体が震える。あれは人間じゃない。きっと幽霊かなんか。天井に足をつけて立ってたんだから。あれはぶら下がってたとは言えない。絶対に。
上を向いたとき、あいつの顔は僕の顔の真ん前にあった。あいつは僕を見下ろしてた。違う、あいつからすると僕を見上げてたことになるのかな？
あいつの姿は今でも鮮明に覚えてる。真っ黒な短髪に赤い瞳の少年。顔は……恐ろしいほどに整っていた。黒い布で身を包んでいたその姿は異様。
怖い。あんなもの二度とみたくない。あっ、ダメだ、また泣きそう。
その時、保健室のドアが開いた。保健室に人がいる気配はなかったので、おそらく養護教諭が戻ってきたんだと思う。
コツコツと足音が聞こえたかと思うと、カーテンが開き、その隙間から養護教諭が顔を覗かせた。
「起きた？　もう放課後よ」
「はい……ついさっき目が覚めました。まさか、そんなに眠ってたなんて……」
ゆっくりと起き上がり、暗い声でそう答える。何だか体がダルい。
「そう、じゃあ少しいいかな？　話したいことがあるの」
先生が微笑みながら言う。肩まで伸びた黒髪に優しそうな顔。美人とまではいかないけど、その微笑みは人を魅了するには十分だった。
この坂上瑠璃（サカガミルリ）という先生には何度かお世話になっている。以前、襲われそうになった時に助けてもらったし、相談にのってもらったこともある。
「どうしたら男らしくなれるんですか？」と聞いた時は、「何で男らしくしようと思うの？」と逆に聞かれた。僕ははっきりと答えられなかった。

男らしさ、女らしさ、それは何となくわかる。だけど、いざ面と向かって「何で男らしくいようと思うのか？」と聞かれると困る。よくわからないから。
何でなんだろう？　普通の男の人だったら、そこで「男だから」とでも答えるのかな……。
難しい表情をしていた僕に、先生はこう言った。
「玲君、無理に頑張らなくてもいいと思うの。あなたはあなたらしく生きればいいじゃない」
あの時の先生の言葉は今も僕を悩ませる。自分らしく……か。そんなこと言ったって自分の性格が気にくわない場合は無理じゃないかなぁ。
「コーヒー、早く飲まないと冷めちゃうよ？」
テーブルを挟んで向かいに座っている先生が、両手でコーヒーカップを持ちながら言う。
テーブルを囲むように皮のソファーがあり、現在、僕と先生はそこに向かい合って座っている。
それにしても、この保健室にはやたらと色々な物がある。パソコンや机は当たり前として、大型テレビや漫画、ゲーム機、食器、冷蔵庫などがあるのはおかしい。
「せっかく高級豆を使ってるんだから、おいしいうちに飲まなきゃ」
先生の言う自分らしく生きるという意味はわかるけど、これはいくら何でもやりすぎじゃないかなぁ。もしかして、保健室を自分の部屋だと思ってるとか？
そういえば、前に一度それについて質問したことあったっけ。「校長に許可貰ってあるらいいの」って一言で返されたけど。
「じゃあ、いただきま～す」
口に含んだコーヒーはすごくマズかった。すでに冷めていたというのもあるけど、一番の理由はただ単にコーヒーが嫌いだから。
でも、せっかく入れてくれたんだから飲まずにはいられない。泣きそうになるのを我慢して一気に飲み干す。

「コーヒーが嫌いならそうだと言ってくれたらいいのに。嫌いなものを無理矢理飲ませるわけないじゃない」
「へっ？　何で嫌いだと思ったんですか？」
「だって涙目になってるもの。ミルクを入れた方がよかった？　それとも、コーヒーじゃなくてジュースの方がよかった？」
先生がクスクスと笑う。むっ、なんか子供扱いされてる。いや、まだ子供なんだけどさ。そもそもコーヒーをブラックで飲める大人だって少ないでしょ？
「ちょっ、ちょっと目にゴミが入っただけです。べっ別にコーヒーくらいミルクを入れなくても飲めます」
制服の袖で目をゴシゴシとこすりながら答える。思わず嘘をついてしまった。こんな風に反抗するあたりも子供くさいとは思うんだけど、どうしてもやっちゃうんだよね。
「そっか、ごめんね。勘違いしちゃって」
言葉とは裏腹に先生の顔はニヤついている。やっぱり嘘だとバレてるみたい。
「べっ別に謝らなくてもいいですよ！　あっ、そっそういえば話したいことってなんですか？」
恥ずかしさに耐えきれなくなった僕は話題を変えようと試みるが、それも全然ダメだった。
その証拠に、未だにニヤニヤしている先生が目に入る。まあ、それも数秒間だけで、その後に先生は普通に話し始めたんだけどね。
「これから言うことは大切だからよく聞いてね？　途中で信じられないと思うかもしれないけど、それでも最後まで聞いて」
その言葉にコクリと頷く。大切な話って一体何だろ？　しかも、信じられないかもしれない話って……想像もつかない。
先程とは打って変わって真面目な顔をする先生に、自然と僕の体にも力がはいる。
「玲君は自分の体について不思議に思ったことはない？」
「不思議というか変だと思ったことはあります。いくら鍛えても全

然筋肉がつかないし、それに肌を焼こうと思っても赤くなるだけなんです」
「後半に関しては肌が弱いだけだから別として、筋肉がつかないことは不思議ね。普通、男の子は女の子よりも筋肉がつきやすいはずだから」
先生の言った、『普通』という言葉が気になった。つまり僕は普通じゃないの？　もしかして、病気か何かにかかってるとか？
「僕って……病気か何かですか？」
「いいえ、違う。そうならいいんだけど……」
あれ？　それってヒドくない？　僕が病気でも全然問題ないって言ってるようなものじゃ……。
「あっ、勘違いしないでね。別に玲君が病気にかかっても問題ないって意味じゃないから」
良かった。違うんだ。あと少しでも遅かったら泣き崩れるとこだよ。
「つまり、何かの病気の方がまだ良かったかもって言ってるの。玲君にはかなり特殊な事情があるのよ。それも、目玉が飛び出るくらい驚きのーーね」
『ね』の前の間が、これから話すことの凄さを物語っている気がした。
僕の特殊な事情ってそんなにも凄いものなんだろうか。あなたは実は地球外生命体だったとか、超能力者だったとか、魔法使いだったとか、まさかそんな非現実的なことを言うわけーー
「あなたは実は女の子なの」
あった。先生の言葉を借りる訳じゃないけど、目玉が飛び出るかと思うほど驚いた。
勘違いしないでほしい。先生の言葉を信じて驚いたんじゃなくて、その言葉の意味の不明さに驚いたんだ。
「あの……もう一回言って下さいませんか？」
目をパチパチさせながら聞く。

「だから～あなたは女の子なのよ。信じられないかもしれないけど」
信じられるわけがない。この話を信じる人がいたのなら、その人は何かの宗教によって洗脳されているか、頭がいかれてる人だと思う。
「先生、冗談はやめて下さいよ。本当のことを教えて下さい」
「冗談なんかじゃないわ。私はいたって真面目よ」
先生が少しムスッとしながら言った。よくよく考えると先生が嘘をつくとは思えない。
というのも、基本的に先生は真面目で優しい人だからだ。保健室に好き勝手に私物を置いているけれど、変なところはそれくらいで、後は普通の人と変わらない。
今年、二十七才を迎える坂上先生は生徒達に好かれる良い先生なのだ。
だからこそ思う。何で先生はこんなことを言うんだろって。
やっぱりあれをしてしまったのかな？　あれというのは麻薬とかそういうことじゃなくて、誰もが経験すること、つまりあれだよ。
「先生、どこかに頭打ちましたか？　それもかなり強く……」
頭を打つ。それは誰にでもあることだと思う。転んだときとか、誰かとぶつかったときとかに。
だから、だからこの質問をしたのに。
「それ、どういう意味かな？」
何で先生は怒ってるの？　心配の意味も含めて聞いたのに。ほら、頭をぶつけて脳出血とかしてたら大変でしょ？
「聞いてるかな？　それ、どういう意味って聞いてるの」
一見すると、笑顔であるため怒っているようには見えない。でも、声で怒っているのがわかる。必死に怒りを抑えてる状態だ。真面目で優しい先生というのはどこにいったんだろ？
「でっですから、お頭をどこかにぶつけておしまいになり……それで……あの……おかしなことを……」
引きつった顔で答える。接客口調になっているのは気にしないで

ほしい。
「へぇー。私が頭をぶつけたから変なことを言ったと、そう言いたいわけ？」
「はっはい……。先生が嘘をおつきになるとは考えられませんですし、だからーー」
「頭がおかしくなったと？」
「いや、そんなこと言うつもりは……」
なかった。まあ、思ってはいたんだけどね。
先生の顔がピクピクと動き始めた。あと少しで我慢の限界に達してしまいそうなのか、それとも既に我慢の限界に達してしまったのか、一体どっちなんだろう？
「あーめんどくせぇー！　もう無理だ！　良い人を演じるのも疲れんだよ！」
どうやら後者だったみたい。笑顔が一瞬にして般若のような顔に変わった。今までの先生からは想像も出来ないような顔。
雰囲気もガラリと変わり、口調も全く違うものになった。このドスの利いた声と相手を寄せ付けないかのような雰囲気は、先生というより姉御だ。
もし今、「あたいは〇〇組の女だ」と言われたら本気で信じると思う。それぐらい先生は変貌した。
「もう我慢する必要ないよな！　あたいが今まで良い人のフリをしてたのは今日のためだったわけだし？　もう言うことは伝えたから関係ないだろ！　つーか、第一、何でこんなことするためにいちいち養護教諭なんかやらなきゃダメなんだよ！」
先生もとい姉御が喚きちらす。僕はというと、それを目の前にして平然としていられるわけもなく、ソファーの上で縮こまるしかなかった。
当然のことのように涙は溢れてくるし体はブルブル震える。教室にいたときの一部の男子生徒も怖かったけど、これはその比にならない。

「つか、お前！　あたいのことバカにしやがったよな？　頭打っただって？　それって遠回しに頭がおかしいって言ってるのと同じなんだよ！」
先生が立ち上がって僕の側まで移動してくる。そして、その恐ろしい顔で、ソファーの上で縮こまっている僕を見下ろしてくる。
「ひっ、あっ、あう、あ、す、すみませんでした」
ただ謝ることしかできなかった。相談に乗ってくれたりした先生が、実はこんなんだったなんて信じたくない……。
「お前な、謝ればすむって問題じゃないぞ？　いくら抱きしめたいくらい可愛いくて、お持ち帰りしたくて、なでなでしたくて、ペットにしたいからといって許すわけないだろ！いや、本当は許したいが……じゃなくて、許すわけにいかねんだよ！」
何を言いたいのかはよくわからないけど、許してくれないということだけはわかった。だから、もう一回だけ精一杯謝ってみる。先生の方を見上げながら。
「うぐっ、ごめんなさい。ごめっごめんなさい……」
「あー！　やめろ！　そんな目で見るな！ドキドキしちまっーー」
突如、ガラッ！と先生の言葉を遮るかのように保健室のドアが開いた。そして、それとほぼ同時に聞き覚えのある声が聞こえた。
「失礼しま～す。先生、玲は起きましたか？」
誠だ。相変わらずの爽やかな声をしている。
「あっ、起きてんじゃんーーって、あれ？　坂上先生、なんで玲は泣いてるんですか？」
誠が僕の方を見た後、先生の方を見て言う。
誠はめったにノックをしない。本人いわく癖だから仕方ないんだとか。大人になる前にその癖を直さないと大変なことになりそう。
「はっ！　まさか！　二人であんなことやこんなことをしてたんじゃ……！　玲が泣いているところを見ると先生が攻めだな……。いや、そんなことよりも保健室で先生となんて……うらやまっ……いや、けしからんーー」

僕と先生を数回交互に見た後、誠が一人でぶつぶつと何かを言い始めた。あんなことやこんなことって一体何のことだろう？　どうでもいいからとりあえず助けてほしい。
「誠……先生が……グスッ……僕をーー」
「誠君、玲君は目にゴミが入っちゃったみたいなの。結構大きなゴミだから痛いらしいのよ」
先生が僕の言葉を遮った。先程と違い、先生は満面の笑みを浮かべている。ついさっきまでの先生が嘘だと思いたくなるような表情だ。
「えっ、そうだったんですか？　あと少しで鼻血が出るところでしたよ。そうならそうと早く言って下さい」
「ちっ違う。せっ先生が僕をーー」
先生がギロッとこちらを睨んだ。たった一瞬睨まれただけなのに、その一瞬ですべてを悟った。
先生は誠の登場に驚いてたんじゃない。硬直してたんじゃなくて言い訳を考えてただけだなんだ。その睨みはこれ以上何も喋るなという意味だ。
それにしても、誠が先生の話を信じたのが悲しい。いくらなんでも目にゴミが入ったからといって泣き出す人はいないと思う。普通は涙目になるだけだ。
このことから、僕がどれだけ泣き虫だと思われているのかがわかる。
「まったく、そんなことくらいで泣くなよ。ホント泣き虫だな」
誠が呆れたように言う。否定したいけど、そうしたら僕の人生が終わりそうな気がするのでやめておく。
「そんなこと言っちゃいけないわよ。玲君だって泣きたくて泣いたわけじゃないんだから」
「はいはい。わかりましたよ」
『優しい先生』を演じている先生に誠が気の抜けた返事をする。
そういえば、先生はさっき「良い人を演じるのも疲れるんだよ！」

と言っていた。それなのに、良い人を演じている。
何でだろ？　みんなに本性がバレるのが嫌とか？　まあ、いいや。今はそんなことを気にしている場合じゃない。
「あの、先生……もう帰ってもいいですか？」
一刻も早く帰りたい。先生と同じ空間にいるというのが嫌だ。怖いんだもん。
「ん？　そうね、もう帰っていいわ。あの話はどうせ信じてくれないでしょ？」
僕が本当は女だっていう話か。信じるわけない。というか、先生の本性を知ってしまった今、あれは僕をいじめるための冗談なんじゃないかと思えてくる。
「あの話って何ですか？」
誠が口を挟んでくる。
「誠君には関係ない話よ。私と玲君だけの秘密。ねっ、玲君？」
「……」
無言で頷くしかなかった。もはや先生の言動がすべて恐ろしく思えてしまう。
「なんだよ～そんなこと言われると余計気になるじゃないか～」
「しつこい男は嫌われちゃうわよ？」
「はい、気になりません！　そんなことどうでもいいです！　さあ、帰るぞ、玲！」
誠が僕の手を引っ張る。凄い単純な奴だ。一瞬にして諦めたぞ。もしかしたら誠は欠陥だらけなのかもしれない。爽やかさ以外には取り柄がなかったりして……。
あっ、もう一つ取り柄はあった。友達は大切にするってことかな。結構僕のことを心配してくれるし。
「あ、ちょっと待って。玲君、耳貸してくれないかしら？」
誠に引きずられるようにして保健室を出て行こうとしていた僕を、先生が呼び止める。それを聞いた誠はすぐに僕の手を離した。
恐る恐る先生に耳を貸すと、予想通りの展開が待っていた。

「お前、もしも今日の保健室での出来事を誰かに言ったら命はないからな。これは脅しじゃなくて警告だ」
怖い怖い怖い！　幽霊も怖いけどこれも十分に怖い。止まっていたはずの涙がまた出そうになった。
そして、最後に先生が思い出したかのように言った。
「あっそうだ。それと、家に帰ったらあいつに言っといてくれ。『めんどくせーことを押し付けんな』ってな」
この言葉の意味はよく分からなかった。

＊＊＊

ない。家の鍵が無い。家を出る前に鍵を掛けたのを覚えている。だから、カバンに入っていないのはおかしい。
僕は玄関前で焦っていた。鍵が見つからないということは、家に入れないということになるからだ。
家族は僕と両親の三人しかいない。親は共働きな上に、仕事の関係上、朝早くから家を出て夜遅くに帰ってくる。
だから、学校に行く前に鍵を掛けなきゃならないし、帰ってきたときは鍵を開けなきゃいけない。
ああ、どうしよう。二人が帰ってくるまで三時間以上はある。こんなことになるんだったら美海の誘いにのれば良かった。
実は、美海に勉強会に誘われていたのだ。
話は少し前にさかのぼる。誠と一緒に保健室を出た後の話だ。
保健室を出てからすぐに美海に会った。どうやら掃除当番で、すぐには保健室に来れなかったらしい。
「ずっと一緒にいてあげられなくてごめんね」とか言われた。

本人曰く、僕に会いにいくために授業を抜け出そうとしたり、掃除をサボろうとしたとか。でも、それはすべて先生達に止められてしまい、実行できなかったらしい。

先生達のことを「心のない悪魔」だとか言ってたけど、それには賛同できなかった。どう考えても間違えてるのは美海だから。

それに、赤ちゃんじゃないんだから、ずっと一緒にいられても困る。放任主義の僕の親とは正反対だ。

教室に自分の荷物を取りに行き、それから誠と美海と三人で一緒に帰路についた。そして、そのときに例の話をされた。

一週間後にテストがあるから三人で勉強しようと。

美海と誠の成績は良くもないし悪くもない。つまり、普通。

それと同様に僕の成績も悪くはない。英語が壊滅的だけど、その分の点数は他の教科で補っているので問題ないと思う。たぶん。

第一、ここは日本だ。英語なんか知るもんか。日本から出なきゃいいわけだ。

道を尋ねるときに、英語を使う外国人がいるけれど、僕は思う。ここは日本なんだから日本語を話しなよ、と。

そんな考えをもっている僕に、帰り道で美海はこう言った。

「今はグローバルな時代なんだし、英語くらい話せなきゃ。それに、玲なら頑張ればすぐに苦手教科を克服できると思うの」

親の過度な期待は子供を苦しめるんだぞ。あっ、間違えた。美海は親じゃないや。何だか親よりも親らしいから、つい……。

美海が僕を勉強に誘った理由は、苦手な教科を克服させるため。

僕としては、苦手な教科を勉強するよりも得意な教科をやった方が点数が上がると思ったので、誘いを断った。本当のことを言うと、ただ単に英語を勉強したくなかっただけなんだけどね。

誠も少し考えてから、「じゃあ、俺もパス」と言って誘いを断った。

そして現在にいたる。確かに英語は嫌いだけれど、玄関前でずっと立ち続けるよりはマシだ。

今からでも美海のところに行こうかな……。
どうしようかと悩みながら、何となくドアノブに手をかけてみる。もしかしたら、ドアが開くかもしれない。ありえないと思うけど。
「……あれ？」
予想外、ガチャリとドアが開いた。
親が帰って来ているのかもしれない。仕事が早く終ったのかな？
不思議に思いながらも家の玄関に入っていく。
そこであることに気づいた。玄関に靴がないのだ。親が帰って来ているとしたら靴が一足か二足はあるはず。
泥棒。瞬時にその単語が頭に浮かんだ。誰もいないのに鍵が開いてるということはーーやっぱりーーそういうことなんじゃ……。
自分の家が狙われる可能性は十分にある。なんたって、最近この辺りでは空き巣が流行っているからね。
この築十五年のありふれた木造二階建ての家に、泥棒が忍び込んだって不思議じゃない。
「ど、どうしよう。けっ警察でも呼んだ方が……い……いいかな……」
震える手でポケットから携帯電話を取り出す。もう目が潤んできた。泣き虫の自分が嫌になる。
警察を呼んで何もなかったらどうしよう？
電話をかけようとしていた手を止める。まだ事件が起こったって決まった訳じゃないし……。
やっぱり、鍵を掛け忘れただけなのかもしれない。鍵を掛けたつもりになっていた、ということもありうる。
いつまでも悩んでても仕方ない。玄関に立てかけてあった傘を手にとり、ゆっくりと前に進む。
怖くないなんて言ったら嘘になる。しかも、大嘘。でも、これで警察を呼んで何もなかったら、ただの笑い者だ。僕が怖がりだと言うことが近所の人達に知られてしまう。それは嫌だ。
手に持っている傘に水滴が落ちる。ここは屋内なので、もちろん

雨じゃない。僕の涙だ。
まずは一階を調べないといけない。
ドアノブを静かにひねり、まわりの様子に気を付けながらリビングルームへと入っていく。
部屋には誰もいないし、特に変わったところもない。
その後に和室、トイレ、キッチンなどを調べても問題はなかった。
これで一階は調べ終えたことになる。
続いて二階。ここも特に変わったところはなかった。
家の中を全て調べた結果、異常はなかったのだ。どこの部屋も荒らされた形跡はないし、通帳も盗まれてはなかった。
「よかったー。何も起こらなくて」
自分の部屋へ入った僕は、床にへたり込んだ。
夕方ということもあり、僕の部屋は少し薄暗くなっている。
何だか自分が馬鹿馬鹿しくなってきた。何であんなにビクビクしてたんだろう。
そうだ、ただ鍵を掛け忘れただけなんだ。人間の記憶は曖昧なものだから、勘違いすることだってある。
「変に汗かいちゃった。早く着替えよ」
服が体にまとわりついて気持ち悪い。本当ならすぐにでもお風呂に入りたいんだけど、それは絶対にしない。
お風呂は親が帰ってきてから入ることにしてるのだ。誰も家にいないのに一人でお風呂に入るなんて考えただけでも恐ろしい。
カーテンを閉めて部屋の電気をつけた後、洋服だんすから服を取り出すために引き出しを開けようとする。
が、何故か開かない。何がか引っかかっているのかもしれない。
「んぬぬぬぬ！」
できる限りの力を出して開けようとする。
わずかに引き出しが開いたところで異変に気づいた。これは何かが引っかかっていると言うより、中身が重くなったと言った方が合っているような……。

「ふんにゃあああぁぁぁ！」
最後の力を振り絞ると、ギギギッという音とともに引き出しが完全に開いた。
そして次の瞬間、信じられないものを目にしてしまった。
「ひっ……！」
驚愕。タンスの中にあいつがいた。教室で天井に足をつけて立っていたあいつが……！
タンスの引き出しの中に、体を丸めてスッポリとおさまっている。目を瞑っているし、ピクリとも動かないので、生きているのか死んでいるのかもわからない。というか、幽霊だとしたら死んでて当たり前。
「あわわわわ……」
壁際まで後ずさりをする。こんな非現実的なことがあっていいの？　僕としてはよくない。凄くよくない。
あいつが幽霊だとしたら僕に取り憑いたとか？　それ怖い！　スッゴく怖い！　嫌だ！
「幽霊なんか嫌だ！　こわっ……ヒック……怖ーー」
「あ～よく寝た。やはり狭いとこは落ち着くね～」
奴が引き出しから起き上がった。
奴の姿を見るのはこれで二回目になる。黒い短髪に赤い瞳の少年。整った顔立ちをしてはいるものの、赤い瞳と身を包む黒い布のためか、美しいというよりも不気味だ。
正確な年齢はわからないけれど、見た目で判断すると十四、五歳くらいだろうか。少なくとも人間ではないと思うので、あくまで見た目の年齢。
「おっ、帰ってきてたのか。あまりにも暇だったもんで寝てたんだ」
僕の存在に気づいた少年が語りかけてくる。どこかオヤジくさい喋り方の少年に、違和感というか、威圧感というか、とにかく不思議なものを感じる。
そもそも人の家に勝手に上がり込んで何をやってるんだ。不法侵

入だ。ここがアメリカなら正当防衛で撃たれてるぞ。
それにタンスの引き出しに入って眠る奴なんか聞いたことがない。いくら大きいタンスといえど、どうやって入ったんだよ。
「ちょいちょい、そこの君。ボーっとしてないで、話を聞きなさい」
入ることが出来たとしたら、そいつは人間じゃない。そっ、人間じゃないんだよ。おそらくーー
「うわあああああ！」
今更ながら叫ぶ。あまりの出来事に少し現実逃避をしてしまっていた。無駄なことを考えるという現実逃避を。
でも、その効果もすぐに消えてしまったので嫌でも現実に引き戻される。学校の時のように気絶できたらいいのに。
どうでもいいのだけど、あまりの恐怖により涙でさえ流れないことに関してはあの時と一緒。
「うるさいな～。そんなに驚かなくてもいいだろ？」
少年がポリポリと頭をかきながら言う。
「あう、あう、あ……」
恐怖心からか上手く話すことができない。それ以前に、得体の知れない奴と話をしようとすること自体が間違っているのかもしれない。
早く逃げよう。幸い、この部屋の入り口からは余り離れていないし。
「一応言っておくが逃げ出そうとしても無駄だ。地の果てまででも追いかけるからな。そもそも、そんなこと思っていないだろ？」
僕が立ち上がろうとする瞬間という絶妙なタイミングで言われた。これを不幸と言わずになんというのだろう？
僕はとりあえず頷いておいた。
「だろうな。あいつからすでに話は聞いただろうからな。あいつの性格からいって詳しい話をするわけないから、俺が代わりに詳しく説明してやる」
「……」

「どこから話そうか。まずはこの世界のことか？　この世界は情報によって成り立っているというのは既に聞いていると思うが、具体的にどういうことなのかは聞いていないだろ」
「……」
「物事を形作る場合には情報が不可欠だ。ＤＮＡというのは知ってるか？知っててあたり前か。そのＤＮＡの中にある四種類の塩基の配列が異なることによって生物の種の違いが生じる、というのも知ってるな？」
「……」
「返事が無いということは知っているということか。じゃあ、話の続きをしよう。このＤＮＡというのはーー」
「ストッーーープッ！　何を言っているのかわかりません！」
わけの分からないことを話す少年に、我慢できずに叫んでしまった。あまりにも非現実的すぎることを目の当たりにして、僕の感性が崩壊してしまったんだと思う。
少しの間だけ怖がりじゃなくなったのだ。
「ん？　何がわからないんだ？　ＤＮＡについてか？」
「違う！　最初から何を言っているのかわからないんです！」
「はっ？　わからないってどういうことだ？」
「だから、わからないものはわからないって言ってるんです！」
「ＤＮＡの話はともかく、最初の方はわかるだろ」
少年が少しイライラしながら言う。
「わかりません！」
「わからないわけないだろうが！」
少年が怒鳴った。見た目からして僕より年下なはずなのに、妙に迫力がある。
だから、弱虫な僕は言い返すことなど出来るはずもなく、ただ泣きながら謝るしかなかった。
「ひっ！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！　呪い殺さないで下さい！」

少しの間だけ怖がりじゃなくなる、という言葉通り長くは続かなかった。所詮、僕は怖がりなんだ。
「呪い殺すだと！？　……お前、まさかとは思うがーー」
ブルブルと子犬みたいに震えている僕に、少年が恐る恐るこう言った。
「坂上瑠璃の話を聞いてないだろ。なあ、そうなんだろ？」
「ひっ！　な、ななんの話で、で、ですか？」
「おい、怯えすぎだ。そんなに怖がらなくてもいいだろ」
「ゆ、ゆゆゆ、幽霊が怖いのはあたたたりまえ……」
少年がため息をついた。
「やはりそういうことか。安心しろ、俺は幽霊でもないし妖怪でもない。お前の味方だ」
困ったような、呆れたような、複雑な表情をして語りかけてくる。
「味方？」
「そう、味方だ。別にお前を食べたりはしない」
「本当？」
「ああ本当だ」
信用していいのかどうかわからない。得体の知れない人物だし、もしかしたら油断した隙をついて襲ってくるかもしれない。何か信用できる証拠があればいいのだけど。
「信用できないって顔をしているな。何だったら証人を呼ぼうか？
いや、呼んだ方がいいに決まっているな。じゃないとお前は信用してくれそうもない」
「証人？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9416s/

僕の日常にグッバイ

2011年5月5日19時51分発行